

7月の学校だよりの冒頭文です。

西小の子供たちには、『前向きに生きる子』に育ってほしいと思っています。

そのための周りの大人の合言葉は、「だいじょうぶ だいじょうぶ」

是非、子供を取り巻く大人が心をひとつに、「だいじょうぶ だいじょうぶ」の呪文で、子供たちの心の育ちを支えていきましょう、という思いを込めて書きました。

心のたくましさ

「男は、足元の茶色いぬかるみを見ていた。隣に立つ男は、頭上に広がる青空を見ていた。」

——これは、青空が頭上にあるのに、あえてぬかるみを見つめる人。足元のぬかるみを感じつつも、あえて青空を見ようとする人。同じところにいる二人の目の向く先の相違を明確に表している詩です。

人には、この詩のように、「悲観的」「楽観的」など、それぞれ「思いの癖」があるとされています。例えば、自分の中の一点の曇りも許せず自分は駄目だと思う人と、自分のよいところも悪いところも全部ひっくるめて『いいんじゃないか』と思える人と。心配事の9割は起こらないといくら言われたとて、行く先が不安でたまらない人と、根拠を探らずとも『何とかなるんじゃないか』と思える人と。

本校で今年度目標に据えたうちの一つ、「たくましい子の育成」の『たくましい子』とは、『前向きに生きる子』であると共通に捉えて、その育成を目指して教育を進めてきています。「前向きに生きる」といったときには、私はいつでも前述の詩中の後者を強くイメージしています。

以前、ウェルビーイング研究の第一人者である武蔵野大学の前野隆司教授から、氏が研究の末導き出した、「幸せの4つの因子」について教えていただいたことがあります。この「幸せの四つの因子」とは、①ありがとう …感謝の気持ちをもつこと。

②ありのままに…自分を受け入れ、飾らないこと。

③なんとかなる…困難に直面しても、前向きな気持ちをもつこと。

④やってみよう …行動を起こすこと、挑戦すること。 です。

私は常々、「前向きに生きる」ために大切なものの一つに、たとえ足元がぬかるみにあっても、それでも青空を見ようとする、「楽観性」があると思っています。そして、この「幸せの4つの因子」と照らし合わせて見ると、『いいんじゃないか』『なんとかなる』といった「楽観性」と「幸せ」は、実はとても近いものでなのではないかとも。

さらに、幸せと、それから「心のたくましさ」としての「前向きに生きる心持ち」にもつながるであろうこの「楽観性」を子供たちが成長の過程でいかに獲得するかと考えた時に、そこにはやはり周りの大人の関わりが欠かせないと思っています。

まずは、自分を丸ごと受け止めてくれている存在としての関わり。

そして、自分の存在そのものに価値があり、他者に喜びを与えているという実感を与えてくれるような関わり。

また、心配したり、もう駄目だと思ったりしたけれど、大丈夫と元気づけてくれ、「結局、事もなく過ごせた、そうでもなかった、どうにかなった」という経験を喜び合ってくれるような関わり。

子供たちを取り巻く大人として、私どもと皆様が、そういった子供たちとの関わりを重ねていくことで、子供たちの「心のたくましさ」を着実に育てていけるのではないかと思います。私が描くモデルは、「だいじょうぶ だいじょうぶ」（いとうひろし 作・絵 1995年 講談社）という絵本の中にあります。機会がありましたら、ご一読をいただき、皆様と心を合わせていければと願っております。

